

論 文

中村星湖「村の西郷」の履歴

加藤 禎 行

一、一九〇九〔明治42〕年の中村星湖

紅野敏郎他編『日本近代短篇小説選 明治篇2』（二〇一三〔平成25〕年二月、岩波書店）を閲覧し、何気なく目次を開く。そこに列挙されている日露戦後文壇の代表的な作者とその小説を目で追い掛けると、ふと中村星湖「村の西郷」が目にとまる。なるほど、中村星湖が執筆した小説としては、この小説がアンソロジーにおいて選択されたのかと思いつつ、なぜこの小説が収録されるようになったのかという理由やその経緯は気掛かりで、やはり、少しばかりこの小説の履歴を調べてみたくなる。

小説が執筆され初出雑誌、初出新聞に掲載され、そのうち初刊単行本が刊行される。再版単行本が印刷されることもあれば、そのまま版を重ねることはなければ、読みうる本文としては途絶し、そのまま初刊単行本のみで読むしかない小説もある。また、書物メディアを乗り換えて、広く流布し継続的に読者と出会い、日本文学全集の一冊に居場所を得るもの、文庫本となり広範な読者を獲得するものなど、それぞれの小説の行方は異なっている。それぞれの小説は文学史の年表に記入されるものもあれば、そのまま埋没し新しい読者に再発見され、新しく価値付けされるのを待っている小説もあるだろう。現在のように、近代日本で出版された書物メディアのデジタルデータ化が劇的に進む環境では、検索結果が時系列順に並べられ、一見するとその検索結果の一覧は、秩序だった年表のようにも見受けられるが、そうした時系列の事情は掘り下げなければ窺えない。それでは中村星湖「村の西郷」の場合はどうだったのか。

中村星湖は、山梨県南都留郡河口村出身の作家で、一九〇三〔明治36〕年四月、早稲田大学高等予科入学のために上京する^{注1}。翌年の一九〇四〔明治37〕年九月、早稲田大学英文科に入学し、『万朝報』への懸賞小説投稿や、泉鏡花の選で『新小説』懸賞小説の一等当選作となった「盲巡礼」（『新小説』

一九〇六〔明治39〕年一月）などで、徐々にその名を文壇に知られるようになっていたが、その出世作としては、やはり『早稲田文学』懸賞小説当選作となった「少年行」（『早稲田文学』一九〇七〔明治40〕年五月）が挙げられる。そしてこの小説を、二葉亭四迷による選評「『少年行』に就て」（『早稲田文学』一九〇七〔明治40〕年五月）が、そのローカルカラーを高く評価ことは知られている^{注2}。一九〇七〔明治40〕年七月、早稲田大学を卒業した中村星湖は、島村抱月の仲介で『早稲田文学』記者となり、一九一九〔大正8〕年一月まで勤めた。また第一単行本『半生』（一九〇八〔明治41〕年一二月）を早稲田文学社から刊行している。同書は「親」「病女」「古屋」「焼場の女」「驕児」「乞食」「蒲生伍長」「尚志社」「近江の宿」「競売」「焚火」「町はづれ」の一二篇を収録した。

中村星湖「村の西郷」は『秀才文壇』（一九〇九〔明治42〕年七月）掲載の短編小説だったが、この小説が同時代的に話題を集めていた痕跡は決して多くない。

それでも、中村星湖の先輩筋に当たる相馬御風は、『早稲田文学』の時評で「村の西郷」を採り上げている。相馬御風「七月の小説界」（『早稲田文学』一九〇九〔明治42〕年八月）は、「田舎に能く見る一種の変り者、馬鹿か豪傑か見分けのつかぬやうな男を描いたものだが、妙写がいかに力づくよく行つて居る。星湖氏は由来斯う云つた類の男を描くに妙を得て居る。ホキタ々した作者の筆致が、かう云ふ人物を描くに、自然の調和を得て居るのだらう。主人公の子が馬鹿にもならず、悪漢にもなりさうでなく、小学校では首席を占めて居ると云ふ結末が、斯う云ふ人物を描いた従来の作物から、一步を進めて、新しいサムシングを暗示して居る。作者の観察の此処まで行き届いたのは面白い。」と、主人公の子が「馬鹿」や「悪漢」にもならず、陰惨な結末を回避した小説の筋立てにふれつつ、後輩星湖を鼓舞している。

また、無署名「寄贈されたる雑誌」(『文章世界』一九〇九(明治42)年八月)もこの小説を拾い上げ、「▲秀才文壇 第九卷第十五号 中村星湖の「村の西郷」は「西郷」と紳名で通つた村の放埒な男を描いたもので、其の性格なり生活なりが可なりよく出てゐる。作者の筆致が元来華やかでないだけに、かういふ題材になると、思ふさま其の特色が発揮されてゐるやうに感ぜられる。」と述べている。このように調査してみると、どうやら「村の西郷」は一九〇九(明治42)年の中村星湖の代表的な小説として取り扱われていたとは言えないことが窺える。

それでは『早稲田文学』の新人編集者であり、『早稲田文学』のプロモーションで日露戦後文壇の新進作家となりつつあった中村星湖にとって、一九〇九(明治42)年とはどのような年だったのか。この年に同時代の新聞雑誌で時評の対象として話題が集中した小説としては、いずれも『早稲田文学』に掲載された「朝鮮から朝鮮へ」(二月)、「木像の批評」(七月)、「一切の事」(一〇月)が挙げられる。なかでも「一切の事」への評価が、際立って高い。一九〇九(明治42)年の中村星湖の代表作を採り上げるならば、むしろこちらの小説が適切だろう。

XYZ「現文壇の鳥瞰図」(『文章世界』秋風号、一九〇九(明治42)年十一月)では、「中村星湖の近作『一切の事』は人をして彼の未来の進境の計るべからざることを思はしめた作だ。在来の彼の筆致は、長篇『少年行』の才華を深く蔵めて、偏へに堅実を旨としてゐたが、近時次第に其の殻を破つて、縦横無礙の態を示して来た。而して『一切の事』は此の意味に於ける彼の筆力を十分に發揮したものである。若し夫れ今の文壇に於いて、前途最も多望なる作家とはいはゞ、僕は言下に星湖を以てこれに答へるであらう。」と評されている。これは無署名のコメントながら、新進作家に対するものとしては破格の肯定評価であったと見てよい。

同じ号で田山花袋「文壇一夕話」(『文章世界』秋風号、一九〇九(明治42)年十一月)が、「秋の創作界は中々賑やかだった。私の見たもの、中では星湖君の『一切の事』を好いと思つた。ハウプトマンの『平和祭』が何となく思はれて、一種の暗い気持が頭に残つた。作者のジミな暗い筆つきが、あの暗い色を描くに最も適当でありエツフエクティブであると思つた。」と言う。す

に「蒲団」(『新小説』一九〇七(明治40)年九月)の発表により文壇状況を大きく動かした自然主義作家田山花袋は、この年には、長篇小説『田舎教師』(一九〇九(明治42)年一〇月、左久良書房)を書き下ろして刊行できるだけの地歩を文壇に築いており、その花袋からの批評は星湖を喜ばせたに違いない。

XYZ「現文壇の鳥瞰図」での肯定評価は、「△中村星湖を文章世界の記者が舞上げて仕舞つた。」(無署名「緩調急調」『新声』一九〇九(明治42)年十二月)と文壇ゴシップで揶揄されてもいるが、「若い作家達では、中村星湖氏が過半期になつて鋭鋒を仄めかした」(三島霜川「四十二年の創作界」『新声』一九〇九(明治42)年十二月)、そして「四十二年の秋ごろより文壇一部の重望を寄せらるゝに至る。」(無署名「現代文芸百家小伝」『新潮』一九一〇(明治43)年一月)と評されるように、「一切の事」の好評価は、新進作家中村星湖の威信を高めていた。だから『中央公論』編集者瀧田樗陰が、樗陰生「己西文壇概観」(『中央公論』一九一〇(明治43)年一月)において、「又中村星湖氏も近來の進境頗る目覚しく。『一切の事』は僕は世人が褒める程感心しないが、『白昼』『木像の批評』等は非常に面白く読んだ。全体に亘つて芸術の臭ひが少し足らぬと思はるゝ点はあるが発達する人も知れないと考へらるゝ。」という感想を漏らしているのも了解できる。

中村星湖の第二単行本『星湖集』(一九一〇(明治43)年四月、東雲堂書店)は、この好評価を承けて、誇らしげに「一切の事」を巻頭に掲げ刊行された。同書自序の中村星湖「はしがき」では「明治四十一年末から四十三年の始め頃までの自作の重なるもの十四篇を集めて『一切の事』『犬ころ』以外はすべて作の出来順によつて並べて見た。」と述べている。収録されたのは「一切の事」「白昼」「朝鮮へ朝鮮から」「つゝ音」「石を持つた女」「村の西郷」「木像の批評」「行路病者」「嬌笑」「つなぎ糸」「敵地」「畑」「犬ころ」「粉負ひ」の十四篇であった。そして、この『星湖集』が「村の西郷」の初刊単行本だったことになる。

二、「村の西郷」の時空間

そもそも中村星湖「村の西郷」は、どういった小説だったのか。先に見た同時代評では、「田舎に能く見る一種の変り者、馬鹿か豪傑か見分けのつかぬやうな男を描いたもの」（相馬御風）、「西郷」と綽名で通った村の放埒な男を描いたもの（無署名）と紹介されていた。

先行研究を参照してみると、吉田精一「中村星湖と水野仙子」（『自然主義の研究 下巻』一九五八〈昭和33〉年一月、東京堂）は、「少年行」以降の自然主義時代における中村星湖について、「花袋の「平面描写」は、彼の信奉するところであつて、自己を抑へて対象に忠実であらうとするあまり、重厚だが平板に陥り、「少年行」の詩趣はもはや見られない。とくべつにきらめきのある直観や、特色ある鋭い観察があるのでもなく、郷里の地方色描写に精彩のある以外には、時に平凡にすぎて趣致のとぼしい人生記録が多い」と冷評し、「村の西郷」は「愚かしい人間性」を描き出したものとしている。伴悦「中村星湖」（川副国基編『文学・一九一〇年代』一九七九〈昭和54〉年三月、明治書院）は、「大酒飲みで変人の主人公のまわりには、あかるさが漂っている」と述べつつ、「大酒飲みの西郷は大食漢の粉負いの吉となつてあらわれる」と「粉負ひ」（『太陽』一九一〇〈明治43〉年三月）への繋がりを確認している。中村星湖「村の西郷」は、今はもう大人になつてしまつた「私」が、一人称の回想によつて、記憶に深く残る人物を描き出していくという作法で書かれている。この小説の形式は、自然主義文学の機運が高まりつつあつた日露戦後の文壇で広く読まれた国木田独歩『独歩集』（一九〇五〈明治38〉年七月、近事画報社）などでも繰り返し用いられたもので、正宗白鳥が「処女作の回顧」（『文章世界』一九一六〈大正5〉年五月）で「塵埃」など二三の短篇を執筆する以前に、偶然『独歩集』を読んで非常に感歎して、その批評を新聞に書きましたが、感歎しながらも、内心、『かういふ小説なら私にでも書ける』と思ひました。」と「発奮の動機」として語つたような形式でもあつた。

小説の空間軸は、「秋の始めに湖水から吹きあてる風は烈しかった。」「信玄公の少い時の名を俺が付け変へてやつたぞ。」「私の故郷は山国なので、冬春は雪が繁かつた。」と差し挟まれた記述から、どうやら中村星湖が生い育つ

た山梨県南都留郡周辺を描いたものと見做してもよさそうだ。こうした空間軸の明瞭さに対して、「西郷」と呼ばれた村人についての断片的な伝聞や追憶を連鎖させることで「私」が小説記述を編み上げていく過程では、あからさまに年号を示唆することもないため、小説の時間軸は注意深く観察しないと実に把握しづらい。「私」イコール中村星湖その人と見做したいわけではないが、試みに中村星湖その人に近似した人物と思われる「私」に、実作者中村星湖の年齢を重ね合わせながら、小説における追憶をつかさどる人物「私」の回想を確認してみたい。

小説本文は、空自行によつて五つの場面に分割されている。第一の場面では、両親に勘当されていた、本名は源吉という「真赤なお多福面」で「獅子鼻」の男が、村に再び戻つて来て「己は西郷隆盛だぞ!」と繰り返して怒鳴ることですつかり「西郷」が綽名となつた経緯が語られる。そして「西郷」が「五合の油を飲み乾した」豪快な挿話や、「よく村役場へ来ては——役場は学校の側に在つた——村長などを相手に議論をして」おり「法律に明るい」らしいことも伝えられている。これは「西郷」が南都留郡道志村に移居に出つた時代に「馬鹿だからつて親たちが弟に家を譲つたのを口惜しがつて」勉強したためらしい。「西郷」は家督相続ができなかつた長男だつた。

小説冒頭では、「西南戦争」と言へば、其頃は、松の根を焚いて燈火に代へた家の多かつた私の村までも、その九州の涯の騒ぎが、洪水のやうに打寄せて来て」とあるが、そもそも一八八四（明治17）年二月一日生まれの中村星湖は、西南戦争（一八七七年〈明治10〉年一月〜九月）を知らない世代だ。だから、続く「西郷は死にはせぬ、死んだと言ふのは官軍に油断をさせる策略だ。」とよくある臆測談の、まだ迹を絶たなかつた頃」に「村の西郷」と呼ばれる男が「己は西郷隆盛だぞ!」と怒鳴り歩き始める、という記述も「私」には知る由もない風説、風聞なので、「（このあたりは私が子供の頃、誰からともなく聞いた話だ。）」と「私」は括弧付きで挿入するしかないのだらう^{注3}。

一八九〇（明治23）年四月、中村星湖は六歳となり河口小学校に入学している。いきおい「私が小学校へ通ふ頃」にいたつてようやく、「私」による小説記述は、少しずつ伝聞ではなく記憶に基づくようになっていく。

第二の場面では、「西郷」の家の事情が語られる。「西郷」の家は「私」

の家からもすぐ見える「破れた壁」の粗末な家で、茂右衛門とその妻の婆さん、「西郷」の弟となる市蔵とその妻の「お友」、子の亀太郎が暮らしていた。しかし茂右衛門は船から落ちて死に、市蔵も病で亡くなってしまう。「其頃まで、時々来ては難題を持込んで、やがて何処ぞへ行つて了ふ「西郷」が、弟が死んだと聞いてまた帰つて来た。」と、「西郷」の何度目かの帰郷が回想されている。「亭主に死なれた頃はまだ四才か五才だった」亀太郎が次の場面では学齢に達しているので、これは第三の場面の少し前の出来事だろう。「西郷」は逃げ回る「お近」に求婚し世帯を持つたが、「可成の容色」の「お近」は、酔つ払つた「西郷」に馬乗りになつて「拳固を振廻す」ほどに「西郷」を御す女性だった。やがて「半年ばかり経つて」、「お近」が「西郷」の子を身籠つたという風聞が「私」のもとにも届く。しかも「西郷」と「お近」の子は「それから一年置き位に、続け様に二人も三人も」生まれたという。「私も最早十一二になつて居たので、さうした世間話に対して多少の好奇心を持つた。」と「私」は回想しており、「西郷」と「お近」の最初の子が出来たのは一八九四（明治27）年から一八九五（明治28）年頃と推察できる^{注4}。

第三の場面は、「弟の子が学校へ上るやうになつてから」とあり、また前後の場面から、一八九六（明治29）年頃を描いた場面と見ていいのではないか。頻りに「西郷」は学校に現れ「熱心に教室を廻つたり、教師に物を尋ねたり」、教室での教師の説明に「ヒヤ／＼」と「頓驚声」で応じている。小学生たちは出没する「西郷」に「ヒヤ／＼」と綽名を付け、軽快に笑う。ある時、教師の講義を熱心に聞いていた「西郷」だったが、教師は、今教えたなかに「塗炭の苦み」という言葉があつたとして生徒たちに意味を問う。中国の古典籍『書経』に典拠を持つ、耐え難い苦しみ、ひどい苦痛のことなのだが、生徒も「西郷」も判らない。ついに「西郷」がよく行く酒屋の次男が正答を言うと、「西郷」は「ヒヤ／＼」という声を響かせて、懐から取り出した「二た串の白柿」を褒美に与えた。その生徒の「お爺つあん」から「西郷」は生前法律を教わつたらしい。またある時は「西郷」は「己が一つ演説をして聞かせる。」と言つて、運動場に生徒を呼び集め、「ヒヤ／＼」と囁す生徒たちを前に何事かをしゃべり続けていた。

第四の場面は、「たしか、来年の春は町の中学へ行くだと楽しんで居た時

だから、私が十四の冬だつたらう。」とある。中村星湖が山梨県立尋常中学校に入学するのは一八九八（明治31）年四月のことだから、場面は一八九七（明治30）年の冬だろう。大変な積雪で用水路に雪が溜まって水が溢れるため、「私」の家でも水路を切つて水を逃していた。そこで「下の家」に位置する「西郷」が「私」の家を訪れ、「上家であんなに畑へ切り込んだら俺共の家へドン／＼水が押込む……あれでは困りがす。」と談判に来る。だが「私」の父は応ぜず「団子」を出して笑うばかりだ。そこに子供を背負つた「西郷」の妻「お友」がやつて来て「西郷」を一喝すると、「西郷」は「父に幾つも頭を下げて、大人しく、鼻の尻に跟いて」出て行く。父は「今年の春のお祭り」でも「旧暦の祭を新で為るちふ事あない、村会議員を擲り殺せ」と「西郷」が若い衆を扇動したことに触れて、あれくらい厳しく感じなくてはならないと述べた。この「私」の家を「西郷」が訪れた場面の末尾で、ようやく「その頃」「西郷」は五十位だった。」と提示されている。「位」とされてはいるが、仮に「西郷」が一八九七（明治30）年に五〇歳なのだとすると、その生年は一八四七（弘化4）年で、明治維新を二二歳で、西南戦争を三〇歳で見聞した世代だということになる。

第五の場面は、「その後、私は旅へ出た。」という一文で始まる小説末尾の記述だ。中村星湖が早稲田大学高等予科入学のために上京するのは一九〇三（明治36）年四月のことで、この年以降、帰省の折に伝聞する「西郷」の消息が挿話として提示される。「西郷」は四、五人ある子供を学校に通わせ、「二番目の子（即ち彼の長男）」は「尋常科」卒業時に「首席」となり、「私」の弟が二番だった。そしてその「西郷」の子は「鼻の恰好だけは拙かつたが、色の青白い、大人しやかな子」だったと言う。この子が生まれた頃が一八九四（明治27）年から一八九五（明治28）年頃だとすると、この「尋常科」卒業時は、一九〇六（明治39）年から一九〇七（明治40）年頃の出来事であり、その頃の「西郷」は、実に六〇歳近い年齢だったことになる。

さて、「私」が回想で素描した「西郷」の人物像と「西郷」が生きてきた時間からは何が窺えるのだろうか。幕末期に誕生した「西郷」は、明治維新の頃には充分に大人であつたが、親から家督相続を否定され、生家を出奔して方々で働きながら明治開化期を生きた。維新後の近代日本社会では、新政府による学

制（一八七二（明治5）年）や教育令（一八七九（明治12）年）が発せられており、身分性別に区別なく国民皆学が目指される時代が到来している。西南戦争後に三〇代だった「西郷」は、明治期の学校教育に年齢的にアクセスできない。だが「西郷」に向学心や立身出世の動機がなかったわけではなく、酒屋の主人に法律を学びましたし、恐らく見聞したに違いない西南戦争後の自由民権運動の演説による興奮は、「西郷」の「ヒヤ／＼」という掛け声のなかに余韻として響いている。開化期の村に新しく出現した村役場や小学校への執着や愛着も、村が近代化していくなかで、そうした新時代の施設に充分な関わりを持てなかつたことに起因するだろう。幸運なことに、そんな「西郷」は器量の良い「お友」という伴侶を得て、「お友」は「西郷」を殴り付け一喝しながら、二人は子育てや労働に従事し世帯を営んでいる。だから「西郷」は、村のならず者として暴力的に排除されることもなく、貧しいながら村での生活を日露戦争後の一九〇七（明治40）年前後まで送っている。

そしてこの小説は、充分な教育を受ける機会がなく「馬鹿」であるがゆえに親から家督相続させてもらえなかつた「西郷」とは異なり、その子は近代社会における学校教育の恩恵を受け、勉学に励み「尋常科」を首席卒業するという物語でもあるのだから、少なくとも秀才の文字を冠する投書雑誌『秀才文壇』読者は勇気付けられたかもしれない。「村の西郷」は、日清戦後文壇で流行した遺伝と環境が人間の本性を決定付けるというゾライズムの論理を、あつさり裏切っている。

村のならず者と村落という組み合わせは、文学史的な既視感もある。アカツキ叢書第五篇として刊行された田山花袋『重右衛門の最後』（一九〇二（明治35）年五月、新聲社）がそれに当たる。この小説は、村のならず者藤田重右衛門が、立身出世のための上京もできず、村人から疎外されていたが、重右衛門が村に放火を繰り返しているとの噂から、酒に酔ったところを村人に暴行され池で溺死体となって発見されるとい筋立てを持つ。そして重右衛門がならず者になってしまった原因は、先天的な不具と後天的な祖父母からの溺愛による小説では説明されていた。

田山花袋『重右衛門の最後』は、初刊単行本と再刊単行本の間で、別のフレームを与えられて刊行されている。初刊単行本の版元だった新聲社は、

一九〇三（明治36）年九月、佐藤儀助から森山吐虹に会社が売却され、その後、出版活動を停止してゆく。新聲社の資産だった紙型は売り立てられ、日露戦後文壇に多くの新聲社紙型を用いた後印本が確認できる。

『重右衛門の最後』の紙型は、第一頁目の本文冒頭、内題右側にあった「アカツキ第五」という柱状のカットを削り取り、新しく「田山花袋著 村の人」と内題を差し込むことで、田山花袋『村の人』（一九〇八（明治41）年二月、如山堂）の一部として再利用された。田山花袋『村の人』は「重右衛門の最後」「悲劇？」「村の話」の三篇を収録したが、その自序は「信州上水内郡牟礼停車場から一里程東に入った処に、赤塩といふ村落があつて、其処に私の友人が三人居た。今から二十年前に、東京の麹町の汚い英学私塾で知己になつたのである。私は其後其村に三度行つた。一度は避暑に、一度は用談に、一度は友の墓参に。で、私は其村の人々にも逢ひ、出来事をも見、物語をも聞いた。此処に輯めた三篇と、『秋晴』の一篇とは、実に其見聞の余に成つたのである。」と述べる。「重右衛門の最後」は、初出当初の遺伝と環境に基づくゾライズム小説とは別のフレームが施され、地方の村落における人物や風景をローカルカラー豊かに描いた小説へと、別の含意が付加されて、日露戦後文壇の読者に読まれることとなった。花袋の単行本『村の人』というこの標題もまた、「村の西郷」のタイトルと通底する標題だったと見ることができよう。

中村星湖「村の西郷」と同時代の自然主義文学で、村落での生活や旧習について陰鬱さを際立たせて描いたものとしては正宗白鳥「五月職」（『中央公論』一九〇八（明治41）年三月）があるが、中村星湖も「町はづれ」（『早稲田文学』一九〇八（明治41）年六月）、「粉負ひ」（『太陽』一九一〇（明治43）年三月）などの小説を執筆している。

しかし中村星湖「村の西郷」は、そうした陰鬱さは消し去って、牧歌的なローカルカラーを強調しながら、やや戯画的に「西郷」を快活な人物として描き出したものと見てよいし、相馬御風が「新しいサムシング」と評したのも、こうした点にあると考えられる。とはいえ、中村星湖「村の西郷」は、一九〇九（明治42）年の初出時の同時代的局面では、代表作としての脚光を浴びたわけではなく、むしろ活発な創作活動のなかで書かれた小説のひとつとして捉えるのが適当であろう。

三、「村の西郷」の履歴

それでは大正期以降、中村星湖「村の西郷」はどのように読み継がれていったのだろうか。中村星湖『現代代表作叢書第十二篇 少年行』（一九一五〈大正4〉一〇月、植竹書院）には「少年行」「親」「町はずれ」「村の西郷」「行路病者」「一切の事」「畑」「枇杷の実」「むかしの家」「瀬戸うち」「悪戯」「蛆虫のやうに」の一二篇が収録され、そこに「村の西郷」が採録されているのが確認できる。『星湖集』を手に取らなくても、「村の西郷」を読むことはできたということになる。また「少年行」については、中村星湖『代表的名作選集30 少年行』（一九一八〈大正7〉六月、新潮社）としても刊行され、この明治大正作家の名作選集において広く長く読まれていった。

『星湖集』のその後について言及しておけば、『星湖集』後印本も、大正期にはひっそり刊行され続けている。高村光太郎による表紙意匠を備えた東雲堂書店版『星湖集』とは別の表紙意匠で、中村星湖『星湖集』（一九一三〈大正2〉年八月、成光館）が後印本として刊行された。成光館版では「この集を父に捧ぐ」という献辞は削除されたが、自序「はしがき」、目次、本文はそのまま同一紙型が流用されている。奥付によれば「大正二年八月六日三版」とある。東雲堂書店版は初版と再版が刊行されたと見てよいだろうか。発行者は河野源、発行所は「東京市神田区亀住町六番地 成光館発行」と奥付に記された。

さらに『星湖集』紙型は流用される。中村星湖『嬌笑』（一九二一〈大正10〉年六月、文芸研究社）が改題後印本として刊行されている。東雲堂書店版および成光館版にあった自序「はしがき」は削除され、かわりに「ヒサシ」と画工名が署名された白黒印刷の口絵が三葉、挿入されている。そして目次、本文は、東雲堂書店版以来、そのまま同一紙型が流用された。奥付によれば「大正十年六月八日改題五版発行」とある。成光館版では三版と四版が刊行されたとみることができる。「版權所有」という奥付への明記を見ると紙型譲受が行われたようだ。発行者は佐渡急潮、発行所は「東京市京橋区本材木町三丁目廿番地 求光閣内 文芸研究社」と奥付に記された。発行所の表記については同一書籍内で揺れがあり、背と扉には「文化社」とある。随分と不注意な出版

だったのかも推測される。ともあれ、中村星湖「村の西郷」を収録した初刊単行本の命脈は、一九二一〈大正10〉年前後まで続いたことになる。

大正期の中村星湖は『漂泊』（一九一三〈大正2〉年八月、春陽堂）、『女のなか』（一九一三〈大正2〉年一〇月、早稲田文学社）、『失はれた指環』（一九一九〈大正8〉年七月、天佑社）等の著作を刊行しつつ創作活動を継続している。一九一九〈大正8〉年一月、『早稲田文学』記者を辞したのちも『島原の尼』（一九二二〈大正11〉年二月、蔵経書院）を刊行し、新聞雑誌への寄稿も活発だ。

しかしながら、自然主義文学の潮流などすでに前時代の動向であったし、戸川貞雄「中村星湖論」（『早稲田文学』一九二四〈大正13〉年四月）は、「古紙幣無用の弁」と大胆な導入を行いながら、「所謂定評なる古紙幣の相場に頼ることは、たゞに賢くはあるが不見識であるといふのみに止まらず、屢々危険であるという事実を、僕は敢て世の聡明な、然し横着な批評家等のために指摘する。」「星湖氏は、既に定評のある作家である。古い紙幣で、相場の定められた作家の一人である。（中略）試みに、星湖氏に対する定評の内容を煎じ詰めてみるならば、曰く「自然主義作家」の一語に尽きる。」と威勢良く述べていた。かつて中村星湖についてのプロモーションを積極的に行なった雑誌『早稲田文学』においても、星湖は一時代前の作家とみなされるような状況であった。

この頃、中村星湖は、「自分自らについて」（『早稲田文学』一九二四〈大正13〉年三月）で、「少年にして高科に登る、といふ程でもなかつたが、兎に角、比較的年少で、僥倖から文壇といふ舞台に乗り出した自分は、外に對してあせると共に、内に向つて空虚を感じる事がすくなく、その時々々に自分の最善を尽して来た積りであるが、結果から見ると、徒勞に属する場合がずるぶん多かつた。」と述べ、『早稲田文学』懸賞小説当選作となつた「少年行」以降の自身の文筆活動について、自然主義文学運動の一翼を担いながらも文学上の成果として不調であつたと、率直な自己評価を吐露している。

そして続けて、「自分はペイザンである事を恥ぢないばかりでなく、むしろ、それに生れ着いた事を幸福だと感じてゐる。／＼従つて、自分が芸術上で主張し、完成しようとするのは、「大地に即した物」である。「地方主義」また

は「郷土芸術」の名は偏狭な国粹主義としばしば過られるが、その危険を冒しても、自分は自分の志してある一路を進んで、遂に広大無辺の境にまで到達したい。此の芸術上の主義主張は当然自分を農民生活の方へ導いて行く。自分はいか等の間から生れたのだから、かれ等の仲間として自分の終生を捧げた」と語っている。

大正期の終わり頃、中村星湖は「文芸運動としての大地主義」（『早稲田文学』一九二四（大正13）年九月）、「農民文芸問答」（『早稲田文学』一九二六（大正15）年八月）等の評論で知られるように、芸術上の立脚地を農民文学へと傾斜させていた。そして星湖は、一九二六（大正15）年六月、加藤武雄、吉江喬松、犬田卯、和田伝らと農民文芸会を結成し、この農民文芸会は、一九二七（昭和2）年一〇月には雑誌『農民』を新潮社から創刊していく。

そして、この大正期の終わり頃に、中村星湖「村の西郷」を自然主義文学とは別の評価軸で捉え直す傾向が現れはじめる。農民文芸会編『農民文芸十六講』（一九二六（大正15）年一〇月、春陽堂）では、五十公野清一「第四講 自然主義時代及び以降の農民小説」で「村の西郷」は採りあげられ、「源吉」と云ふ、その当時の農村に於て、一般農民よりは水準の低い、少し足りない男を題材に書かれてある。作は甚だしく幼稚であるし、物の見方なども浮つすべりがして居るが、「源吉」綽名を「西郷」と云はれるその男を、ちつと読者が作そのものから切り離して噛みしめて見ると、農民の無智、無邪気、と云ふものがしみじみ感じられる。」と評されている。後進の作家たちによって「村の西郷」は、自然主義時代の小説であることに加えて、農民小説としての評価が付加されていることになる。

また、これと同じ大正時期、高等小学校用の国語課外読本に中村星湖「村の西郷」を教材として採録している事例があり、大正後期の課外読本の問題にも留意したい^{注6}。この時期の高等小学校は、尋常小学校六年を修了したのちに進学する、修業年限二年の学校で、旧制中学校の一、二年生と年齢は同様であった^{注6}。

万福直清、作田重徳編『児童文学鑑賞補充読本 高等一年前期用』（一九二六年（大正15）年三月、東京出版社）においては、「村の西郷」の全文が採録されている。それぞれの頁下部には脚注のための余白が取られ、語註

や解釈のための手引きが丁寧に付加されている。小説末尾の直後には「評釈」「作家小伝」が掲げられたが、その「評釈」冒頭の段落では「この作品は材料そのものがすでに可成りに読者の興味を惹くに足るものである。即ち自ら西郷と名乗る普通以下の、やくざもの、奇言奇行を描いたものであるから、私達はその興味につられて、何時の間にかこの一篇を読み終つてゐる。が、この作をただその興味だけで読み終つてしまふには、あまりに西郷に対して不親切な仕方ではあるまいか。さうかといつてこの作が、非常に勝れた作品だといふのではないが、ともかくも私達は何と好意ある見方で西郷に接しようではないか。」と述べられている。

もう一例、挙げておく。飯島専一編『課外読物／宝玉文集』前編（一九二四年（大正13）年六月、石山書店）には「村の西郷」の一場面がトリミングされて収録されている。収録されたのは、空白行で分割される第三の場面、すなわち「西郷」が学校の教室に出没する場面に相当し、「註 作者は山梨県に生れ早稲田大学文科卒業柔かい筆致で『村の西郷』といふ渾名のついた男の事を叙してゐる静かな山村の学校の様子も如実に覗はれる。」と編者による付言が見られる。飯島専一による本書「はしがき」には「一、前編は尋常小小学上級生及び高等小学生、後編は高等小学生及補習生、各中等学校初年級の人々に好適です全一冊とすべきところ都合によつて分冊にしたのですからつづいて後編をも味ふていたゞきたいと思ひます。」とあり、本書も高等小学校生対象であった。こうした大正期の国語課外読本のヴァリエーションと教室の実態については不明瞭なことも多いが、少なくとも中村星湖「村の西郷」を国語教材として見出し、小説に新しい利活用の局面を付与したことは確かだろう。

一九〇九（明治42）年の初出時においては、活発な創作活動のなかで書かれた小説のひとつに過ぎなかった中村星湖「村の西郷」の位相が変容したのは、およそ、この大正末期ではなかったか。大正末期において、中村星湖「村の西郷」はローカルカラーを精彩に描き出した日露戦後文壇における自然主義小説のひとつという出発点での価値付けに加えて、その後の中村星湖の文学活動に従つて農民文学の文脈が付与され、さらには国語課外読本における教材としての位置も加わった。「村の西郷」を中村星湖の代表作のひとつへと押し上げていくのは、初出時の自然主義文学としての同時代評によるものではなく、むしろ

る事後的に付加された評価軸によると考えるべきではないだろうか。

『世界短篇小説大系 日本篇中』（一九二六〈大正15〉年二月、近代社）というアンソロジーに中村星湖「村の西郷」が収録されている。本書は主に日露戦後文壇の明治文学から構成されているが、冒頭に掲げられた無署名の編者による「序」には、「一作を以てその作家の全体を象徴すると言ふやうなものを選ぶのが六ヶ敷い。だから大抵は作家の自選に俟つた。」とあり、収録の経緯は中村星湖の自選であった可能性もある。一九二六〈大正15〉年、中村星湖「村の西郷」は、星湖の自然主義文学時代という過去を示す小説であり、同時に農民文学運動に携わるといふ現在地を示唆する代表的な小説でもあったと考えることができる。

中村星湖の小説は、改造社版『現代日本文学全集』（全六三巻、第一回配本は第六巻『尾崎紅葉集』一九二六〈大正15〉年一二月、改造社）には収録されなかったが、春陽堂版『明治大正文学全集』（全六〇巻、第一回配本は第五巻『尾崎紅葉』〈昭和2〉年六月、春陽堂）には、『明治大正文学全集30 岩野泡鳴・小川未明・中村星湖』（一九三〇〈昭和5〉年九月、春陽堂）として収録された。

収録されたのは「少年行」「親」「村の西郷」「畑」「通過」の五篇であったが、その巻末に収録された中村星湖「年譜と解説」では、「村の西郷」は四十二年の六月脱稿、八月の「秀才文壇」に発表したものである。「少年行」も「親」も純写実とは言へないが、「村の西郷」となると全く有りのまゝ、の村の人の生活を書いたものである。この頃既に私は「自然主義運動」の雑兵の一人だつたのである。」と述べている。またこの星湖「年譜と解説」では「こゝに収めた長短五篇の作品は、凡そ二十五年に渡る私の作家生活の所産のホンの一部分に過ぎないが、（大正年代の作品も数篇を添へたのであるが、頁数の都合で省く事にした、）とあり、『明治大正文学全集』への収録についても、中村星湖による自選だつたことが判る。

この星湖の自作解説は、「村の西郷」を自然主義文学時代の小説として位置付けつつも、その「年譜と解説」を執筆している現在と自然主義時代は截然と切り離されている^{注2}。そしてまた、この「年譜と解説」は、農民文学の担い手としての星湖の自然主義以後の同時代的な文学上の立ち位置について言及し

ていない。そのため、大正末期における「村の西郷」についての評価軸が、実に見えにくくなっている。

以後は、中村星湖自身による自選を受けて、代表的な短篇小説としての位置が安定したように見受けられる。『明治文学全集72 水野葉舟 中村星湖 三島霜川 上司小剣集』（一九六九〈昭和44〉年五月、筑摩書房）が刊行され、「驕児」「村の西郷」「一切の事」「畑」「粉負ひ」「通過」「蛆虫のやうに」「女のなか」の八篇が収録される。この再録の判断は中村星湖本人によるものではなかったと見受けられるが、本書に掲載された中村星湖の「年譜」末尾には、「本年譜の作製にあたって、小笠原一郎編、星湖補の「星湖年譜」を参照させていただくとともに、中村星湖氏から直接のご教示を得た。記して謝意を表す。（榎本隆司編）」とあり、星湖が『明治文学全集』刊行時、八五歳で存命だった。星湖は、一九七四〈昭和49〉年四月一三日に九〇歳で死去している。

自然主義文学から農民文学へという文学上の移行を説明することになる中村星湖「村の西郷」は、星湖による度重なる自選と再録単行本の刊行を経て、二〇世紀の終わりに紅野敏郎編『精選中村星湖集』（一九九八〈平成10〉年一月、早稲田大学出版部）に、二一世紀の始めには紅野敏郎他編『日本近代短篇小説選 明治篇2』（二〇一三〈平成25〉年二月、岩波書店）へと再録されている。中村星湖「村の西郷」は、一〇〇年もの間、いくつもの書物を持ち継ぎながら現在までたどり着いている。こうした経緯が、中村星湖「村の西郷」の履歴であつたと見ることができよう。

注1 中村星湖の履歴については、「中村星湖年譜」（山梨県立文学館編『中村星湖展』一九九四〈平成6〉年一〇月、山梨県立文学館）、「中村星湖年譜」（紅野敏郎編『精選中村星湖集』一九九八〈平成10〉年一月、早稲田大学出版部）を参照している。

注2 加藤禎行「中村星湖「少年行」試論」（『国文学研究資料館紀要』第二八号、二〇〇二〈平成14〉年二月）で、その趣向や典拠について考えたいことがある。

注3 西郷隆盛生存説については、森銑三『明治東京逸聞史1』（一九六九

〔昭和44〕年三月、平凡社）によれば、別途、一八九一（明治24）年にもあったという。「南洲死せず（東京経済雑誌二四・四・一一）」「西郷翁存命説（国会二四・四・一二）」「西郷どん（国会二四・四・一〇）」と三つの項目で、ロシア皇太子（のちのロシア皇帝ニコライ2世）の来朝に伴ってシベリアに渡った西郷隆盛が帰朝するという風聞が、国内に広がったことを伝えている。なおロシア皇太子は、滋賀県で護衛巡查津田三蔵に切り付けられることとなった（大津事件）。

注4 この小説では村に日清戦争（一八九四（明治27）年七月～一八九五（明治28）年四月）の気配は入り込んで来ない。この時期については、「或年、村に赤痢が流行つて、役場は消毒などで忙しかった。」という記述が見られる。この赤痢流行の記述を参照しながら、新村拓『健康の社会史——養生、衛生から健康増進へ——』（二〇〇六（平成18）年10月、法政大学出版局）は、「伝染病の流行ともなれば、巡查を中心に、医師、役場の書記・小使、衛生組合員らが一体となって駆けずり回ることになった。」（第四章 健康を監視する衛生社会）と、明治期の衛生事情を説明している。

注5 埴谷雄高「少年時代の漱石」（『日本現代文学全集24 夏目漱石（二）』月報51、一九六四（昭和39）年12月、講談社）という回想文では、「中学二年から私は東京の生活をするようになり、そのため探偵小説も映画も、そして、文学的関心も一変するようになったのであった。／＼として最初に接したのが漱石の『坊っちゃん』なのであった。中学二年の国語がどの程度のものであったかはつきり思い返せないけれど、課外読本として選ばれた『坊っちゃん』は二年生全部から喜びをもって迎えられる。（中略）その後の私達はいささか文学づいて、つづけて中村星湖の『少年行』を教室で読み、徳富蘆花の『思出の記』を読んだ。いまから考えると、これらは少年が文学へ向かい始めるときまず読む代表作なのであった。」と述べている。「年譜」（『埴谷雄高全集別巻 資料集・復刻死霊』二〇〇一（平成13）年5月、講談社）に従えば、埴谷雄高は一八九〇（明治42）年1月1日生まれで幼少期を台湾で過ごす、一九二三年（大正12）年4月、一三歳のとき旧制目白中学校二年に

編入している。埴谷雄高が旧制目白中学校で読んだ課外読本の書名は判らず、埴谷が読んだのは中村星湖『少年行』であって「村の西郷」ではないが、大正期の国語副読本における中村星湖の享受といった関心からは、興味深い。

注6 木村勇人「大正時代における「国語副読本」の研究——「国語副読本」に見る「文学」と「教育」の接点——」（全国大学国語教育学会『国語科教育』第46巻、一九九九（平成11）年3月）は、大正後期の「国語副読本」が充実して来る過程について調査を行い、雑誌『赤い鳥』の児童文学運動の広がりについても言及している。中村星湖もまた雑誌『赤い鳥』への度重なる寄稿者のひとりであった。

注7 『早稲田文学』自然主義前後研究号（一九二七（昭和2）年6月）に掲載された中村星湖「自然主義運動の回顧」でも、時代思潮や社会の雰囲気、力点が置かれ、具体的な作家や小説、自分自身の文学活動に筆があまり及ばない。自然主義文学の当事者だった星湖に取って、自然主義時代は積極的に回想したくない過去だったようにも見受けられる。

中村星湖「村の西郷」の履歴

Kato Yoshiyuki

The historical background of “MURA NO SAIGO” written by Nakamura Seiko.

This article introduced the historical background of “MURA NO SAIGO” written by Nakamura Seiko in July 1909.